

---

# 外の支配者の命懸けのサバイバル

脳好き人間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

外の支配者の命懸けのサバイバル

### 【Nコード】

N0124Z

### 【作者名】

脳好き人間

### 【あらすじ】

無人島に五人の代表者が集まり、国を外から支配する権利を懸けて殺し合いを始める。代表者は命懸けで殺し合い、観察者は命懸けで観察する。命懸けの話。

## 戦いの始まり

年に一度、この国ではトップを決める争いがある。

トップとは言っても、総理のことではない。彼等は目立つことを良しとしないのだ。

『外』と名のつく者達、彼等は数百年前から、この国を裏から操ってきた。

一外、白外、札外、武外、吉外、の五つの家の者が一人かずつつここへやってくる。

ここで殺し合いをし、生き残った者がその年、国の支配者となる。

一般人には関係ないように見えるが、その実、相当関係しているのだ。

昔、札外の者が勝ち残ったとき、この国では通り魔、と呼ばれる者が多く出た。

白外が生き残った時にはいじめが大量に起こり、吉外ときは多くの者が発狂した。

いや、一概には言えないけれど。個体差もあるし。

だが、彼等のほとんどが、自分が一番正しいと思っているのだ。

ああ、何故先程の例に一外と武外の名が無いか、かというと。

答えは簡単。彼等は、一度も勝利したことがないのだ。

武外は、無害だ。人を傷付けることが出来ない。一外は、ただの変人だ。戦いには向いていない。

まあ、だからと言って今回も負ける、とは限らないが。

今回の一外は一族の中でも相当の変わり者だ。

どう場を掻き乱してくれるか、全く予想がつかない。

おっと、もう時間のようだ。

それでは皆さん、さようなら。次会う時は、この戦いの終わった後だ。

## 一同対話する

おつと、ここからは私が語り手を引き継がせて頂きます。名は、  
梓外わくがいと申します。

丁度、皆さんも集まられたようですし。

「ふーん、思ってたより簡素な所だね」

一外の代表が周囲を見回しながら言う。しかし、それに応える者はいない。今から殺し合う関係なのだから、無駄な会話をしたくないのだろう。

「…………シカト、か。うう、涙が、出てくるよ」

一外は涙を拭うフリをしながら言う。すると、一人の少女が近づいて来た。武外の代表だ。

「あ、あの、大丈夫ですか？ハンカチ、使ってください」

武外は一外にハンカチを差し出した。今から殺し合う相手に親切

にしたところで、意味などないと思うのだが。

「ありがとう。君は優しいんだね。まあ、初対面だし一概には言えないけど」

「優しくなんてないですよ。私はそのハンカチを持っていたところで、何の役にも立ちませんし」

「何の役にも立ちませんし、だと。何故だ？」

「私、暴力嫌いですから、この戦いで誰かを攻撃することはありません」

「ふむ、答えになっていないな」

「だから、私がハンカチを持ってたところで、すぐ殺されちゃうから意味が……」

「喋んじゃねえカス共。俺様に不快な思いをさせやがって！」

突然の罵声に一外は笑顔で、武外は驚いた顔で振り向く。そこには、白外の代表がいた。

「俺様が出来たんだぞ。早く頭を下げろ。殺すぞ？」

「いやいや、僕は頭を下げると爆発する体質でね。頭を下げられないんだ」

白外の言葉に一外が応じる。

「貴様、俺様を愚弄して……」

「びゅーびゃあーどーん！」

白外の言葉を掻き消したのは、吉外の代表者だった。やはり今回の代表者も話を通じなさそうだ。

「びゃーびゃーきつくー！」

「き、貴様っ！いいかげんに……」

「あらばらはき、さける！」

流石の白外も、吉外の者には敵わなかったようだ。言葉が全て奇声に掻き消されている。

白外と吉外の言葉の応酬はしばらく続いた。

それを遠巻きに眺めているのが、一外と武外、それに札外だ。

一外は微笑み、武外は怯えながら見守っている。

札外は、後ろ手にナイフを持ち、武外に近づいていく。

どうやら、戦いが始まる前に武外の代表者を殺すつもりらしい。それも恐らくは、勝負のためではなく、ただ殺したいから、だろう。札外とはそういうモノだ。

しかし困るな。これでは計画に支障がでる。だが、私は粹外、札外を止めに行くことは出来ない。

それに、札外には今まで何人もの梓外が殺されてきた。安易に近づくのは危険だ。

「おいおい、札外さん。後ろから近づくのは礼儀が……、って女性じゃないか！まさか札外から女性の代表が出るとは……」

札外がナイフを振り上げた瞬間、二人の間に割り込み、一外が喋りかけた。

「今からするのは殺し合いだ。それなのに今回は女性が二人。身体的に女の方が男よりも不利だっていうのに。まあ、一概には言えないけど」

「お前、誰だ？」

札外が一外を睨みながら問う。異常な殺気を伴って。

「僕は一外。よろしく。出来れば仲良くしてくれ」

遠くから観察している私ですら、札外の殺気に恐怖で脚が震えているというのに、一外は札外に握手を求める。

それを札外は無視し、今度は白外、吉外の元へ向かって行った。

一外はそのことに落ち込み、涙を拭うフリをする。

今度は誰も慰めてくれない。先程慰めてくれた武外は、札外の殺気に怯え、気絶してしまっていた。

まあ、そろそろ頃合いか。武外が気絶しているのは気になるが、急がないとトラブルが起こるかもしれない。主に札外と吉外が原因で。

「本年度の戦いを始めます！」

私は大声で叫ぶ。きちんと全員に聞こえるように。

早速、白外と吉外との戦いが始まる。白外はメリケンサック、吉外はスコップを武器としている。

また、一外は気絶している武外を抱え、走り去って行った。

そして、札外は私の方へ、ナイフを振りかざしながら近付いて来る。

ザクツ、と、私の心臓が刺された。ああ、死、確定だ。

私はもう長くない。また、視界が暗くなって、何も見えなくなっ

た。よって、最後に詳しいルール説明を。

この無人島全体が戦いの場であり、どのように戦っても構わない。

武器は、拳銃や、それに準じる物以外なら何を持ち込んでも良い。

五人の内四人が死亡した時点で、生き残った者の勝利となる。

ちなみに、戦いを監視するのは私達枠外の・・・で・・・る。

## 一同対話する（後書き）

登場枠外紹介

枠外 みはる 三春

常に冷静沈着な枠外のエース。弟を溺愛していた。

声を出すのが苦手で、特に大声を出そうとすると緊張で体が動かなくなってしまうていた。

得意料理は目玉焼き。毎朝弟の為に作り、鬱陶しいな、とか思われていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0124z/>

---

外の支配者の命懸けのサバイバル

2011年11月30日20時46分発行